

◆西隆寺旧境内・右京一条二坊の調査 —第299次

1. はじめに

この調査は、都市計画道路建設にともない、奈良市西大寺東町において実施した。調査区は、西隆寺金堂と北面回廊にかかる320m²で、南端の70m²は、1971年度の旧調査区と重複させた。調査地の周囲は、東に第209次（1989年）、北に第212次（1990年）、第221次（1991年）の各調査区が隣接している（図57）。

今回の調査では西隆寺関係の遺構のほかに、西隆寺造営以前の平城京（右京一条二坊十坪）の遺構、および平城京以前の遺構も検出した（図58）。なお、調査区全面にひろがる近世以降の細溝類は記述、図示を省略した。

2. 基本層序

調査区の基本的な土層は、上から近年の盛土、水田耕土、床土、灰褐色土（包含層）と続き、現地表下約0.8m（標高71.70～71.80m前後）で西隆寺関係の遺構を検出した。その下の灰色または黄褐色砂質土面で平城京および平城京以前の遺構を検出した。西隆寺造営時の整地土（黄褐色砂質土）は、回廊以南で薄く認められた。遺跡のベースは基本的に砂質土あるいは砂層である。

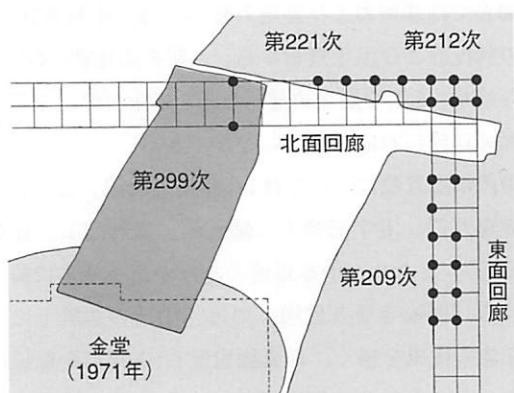


図57 第299次調査区位置図 1:800

3. 検出遺構

西隆寺関係の遺構

SC450 北面回廊。調査区北端で、回廊東北入隅から数えて7間目の柱位置に礎石据付掘形を南北2箇所に検出した。いずれも一辺約1.3mの隅丸方形で、掘形底部がわずかに残る（深さ0.1～0.2m）。掘形埋土は暗褐色砂質土である。間隔は4.8m。回廊の南および北側柱筋にあたる。基壇の掘込みは認められず、直接ベースの砂質土に掘形を穿っている。後世の削平のため基壇土、基壇外装、雨落溝などは失われている。調査区全体でも回廊部分は近世以降の土坑や溝が錯綜し、削平が著しい。

SK697他 土坑群。西隆寺廃絶後、瓦片や、凝灰岩片を廃棄した土坑で、金堂基壇の北側に10箇所ほど群集する。一辺0.5～1m、深さ0.4～0.6mほどのものが多い。

平城京の遺構

SD095 坊間西小路東側溝。調査区南西部の南北溝で、1971年調査のSD095の北延長部。溝内の土層は、大きく上・中・下の3層に分かれる。溝の規模は下層が幅約1.1m、深さ0.4m、中層が幅1.4～1.9m、深さ0.25m、上層は幅約2.5mである。溝の勾配は南下り。中層（暗褐色砂質土）・下層（茶褐色砂質土）が堆積層で上層（灰褐色砂質土）は埋立土である。上層埋土には、小穴3箇所（SX694～696）が穿たれる。各層から土器、少量の瓦、埴輪片が出土。中・上層の土器は多量である。上層からは銀製帶先金具、銅製環珞などの注目すべき遺物も出土した。

SD690 条間北小路南側溝。調査区北よりの東西溝で、大きくA・B・Cの3期にわたる変遷がある（図59）。Aは幅1m、深さ0.25mで、堆積層は上下2層に分かれる。A下層（灰色砂質土）は、調査区のほぼ東半分のみに認められ、北岸の一部に護岸の杭列跡とみられる小穴群がある。堆積層上面は酸化鉄やマンガンが沈着し暗赤褐色をおびる。A上層（灰色砂質土）は、調査区全体を東西に貫通する。

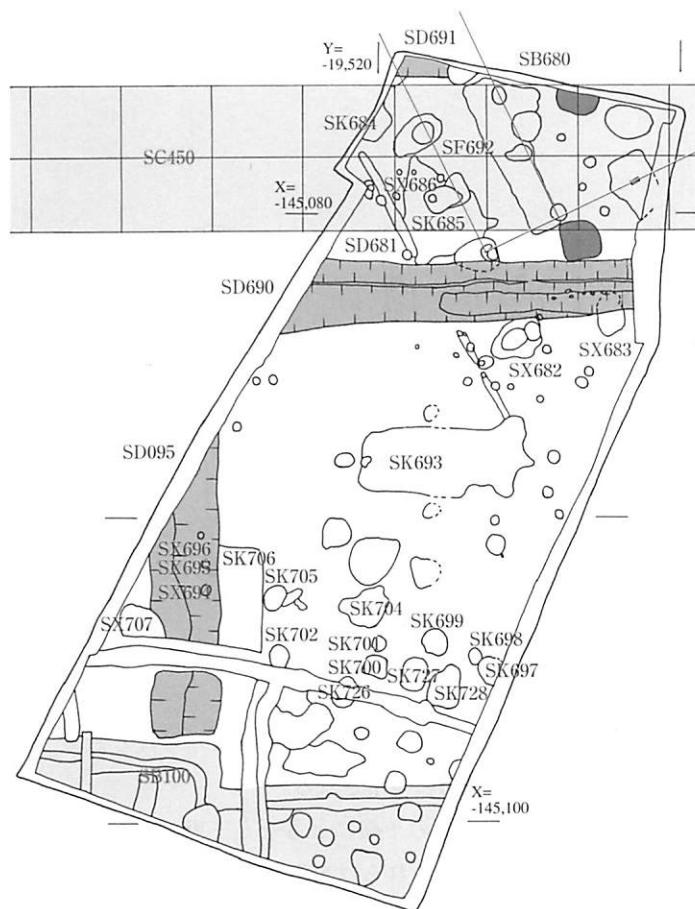


図58 第299次調査区遺構平面図 1:250

する。B(灰色砂質土)は、Aの心々約1m北にあり、幅0.75m、深さ0.25mある。Cは幅2.1m、深さ25cm、溝の最終的な埋立土(黄褐色砂質土)である。溝底部の勾配は基本的に東下がり。A、Bについては、遺構どうしの直接の重複関係はないが、出土土器の様相などからBが新しと判断できる。各層から土器が出土した。Aでは、少量で、上・下層とも平城宮Ⅰ期に限られる。B・Cからは大量に出土しており、時期は平城宮Ⅲ期まである。

SD691 条間北小路北側溝。調査区北西隅に検出した。後世の土坑と重複してわずかに南辺の底部を残すのみ。

SF692 条間北小路。SD690とSD691とに挟まれた東西方向の空間。路面幅は約6.0m。

SK693 土坑。東西約5.8m、南北約2.1m、深さ約0.25m、皿状をなす長方形の土坑である。埋土は暗褐色砂質土で、平城Ⅲ期までの土器が少量出土した。

これらの遺構は、西隆寺造営に際しての整地土(黄褐色砂質土)により覆われている。

平城京以前の遺構

調査区北端の掘立柱建物、溝、土坑などである。

SB680 掘立柱建物。北で大きく西に振れる(ほぼN25°W)大型建物の西南部分。この建物の平面、規模は確定しないが、西側に庇のつく平面と仮定して記述する。身舎の柱位置3箇所は布掘状の掘形(幅1m、長さ5.5m。

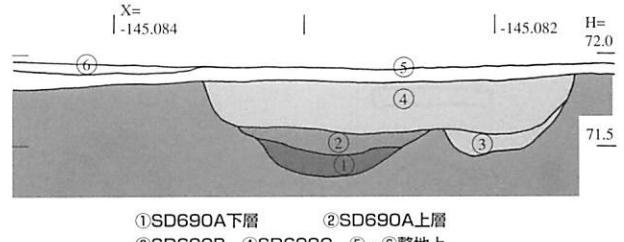


図59 SD690断面図 (Y=-19,518) 1:40

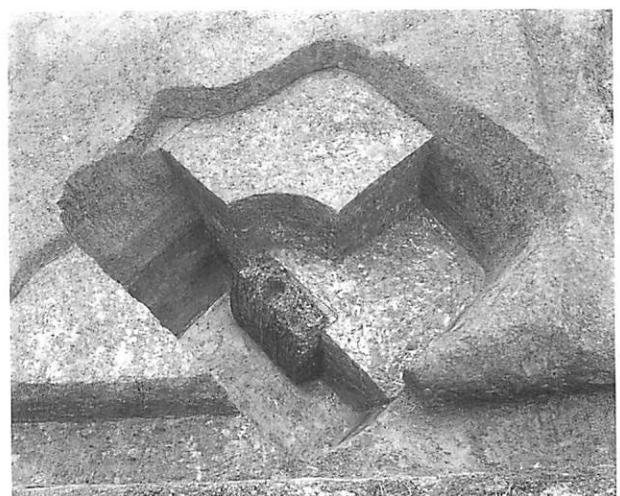


図60 SB680の角柱(東から)

北よりで東に1mほど張り出す。内にある。庇掘形は4箇所あり、1×1.5m前後で東西に長い。妻柱掘形は、2.1×1.2mと南北に長い。掘形の深さは身舎が0.2~0.4m、庇では0.2~0.5m、妻柱掘形が0.9mで最も深い。掘形埋土はいずれも黄褐色粘質土を主体とする。妻柱掘形には角柱の柱根(断面が23×51cmの長方形、長さ42cm、図60)を残し、他は抜き取られている。柱間寸法は、梁間が約2.3m、桁行と庇の出はいずれも約2.7m。

柱根については、当研究所埋蔵文化財センター光谷拓実によって樹種鑑定と年輪年代測定を行ない、材はヒノキで、最外年輪が西暦265年という値を得た。この資料は、樹皮、辺材(シラタ)は残っていない。

SD681・SX686他 SD681はSB680の西約2.2m離れ、SB680と同一の方位をとり、南にのびる細溝。埋土は黄褐色粘土で共通し、SB680と同時期と推定される。SX686他は、小穴群で、埋土は黄褐色粘土であり、SB680の足場穴が含まれている可能性がある。

SK684 土坑。調査区北西隅で検出した一辺1.2mほどの土坑の一部。大部分は調査区外になる。埋土は炭化物混じりの暗褐色砂質土で、古墳時代の須恵器が出土した。

SK685 土坑。SB680庇南端の掘形に重複する。一辺約3m、深さ0.7mまで確認。出土遺物はなく、時期、性格とも不詳だが井戸の可能性がある。

(千田剛道)

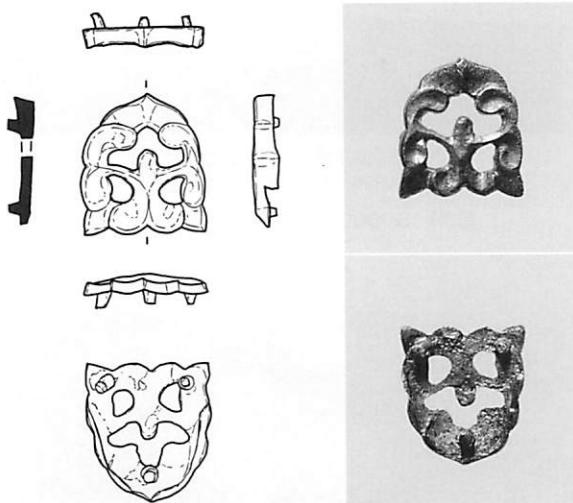


図61 第299次調査出土 銀製帯先金具 1:1

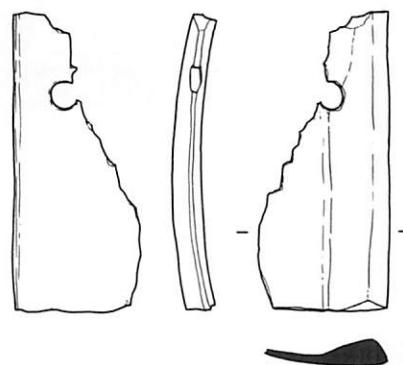


図62 第299次調査出土 銅製瓔珞 1:1

4. 出土遺物

出土遺物には、廃棄土坑出土の大量の瓦塼類、SD095、SD690出土の多量の土器類に加えて、SD095出土の金属製品など注目すべきものがある。

① 金属製品・石製品 整地土や条坊側溝埋土中などから銀製帯先金具、銅製瓔珞などの金属製品、砥石、鉱滓が出土した。

銀製帯先金具（図61）SD095上層出土。頂部中央に対葉花文を基部左右に栓形花を配した花唐草を透かし、裏面に3本の鉢足をもつ表金具である。長さ1.81cm、幅1.64cm、厚さ頂部0.36cm・基部0.15cm、ほぼ純銀製で重量2.8g。類似する文様は、正倉院北倉御冠残の飾金具や、東大寺大仏殿鎮壇具金銅莊大刀の平脱文にみられる。

この帶先金具の用途については、裏面の形状から推定される帶の幅が1.5cm程度とかなり細いことから、腰帶に加えて、刀装具や馬装などに用いられた可能性が想定される。「衣服令」によれば、一品以下、五位以上の朝服として金銀装の腰帶、武官の礼服・朝服として衛府の督・佐に金銀装の腰帶とともに金銀装横刀の佩用が許されていたことが知られる。

刀装具の例としては、東大寺大仏殿鎮壇具金銅莊大刀とともに出土した小型の帶先金具がある（帝室博物館『天平地寶』1937）。これは幅約1.45cmと本例に近く、帶執緯の先金具（紐先金具）とされ、天部像等の短甲付属具との関連も示唆されている（上田三平「東大寺大佛殿須彌境内に於て發見せる遺寶に就て」『寧樂』第8号、1927）。また、唐草文をモチーフとした銀（鍍金）透金具は、鎬の形状等に本例との差異はあるものの、正倉院北倉金銀

鎬装唐大刀、あるいは中倉の60口の刀子鞘にみられるように帶執、鞘尻等の装飾に多用される。

馬装では、正倉院中倉の十鞍にともなう三懸、および鎧鞆の先端にみられる。これらは金銅製で植物文を表現し、裏金具と3本の鉢でとめるもので、長さ2.5~3cmと本例に比してやや大きい（鈴木治「正倉院十鞍について」『書陵部紀要』第14号、1962）。

なお、正倉院には刀子・玉魚など腰帶に付帯する佩具も伝えられており、これらにともなう細帶の金具である可能性も考慮する必要があろう（吉村眞子「唐代の跢蹀帶について」『美術史』第93~96冊、1976）。

いずれにせよ、本例のように銀製で文様を透かした帶先金具の類例は乏しく貴重な資料である。なお、本例と大きさの近い金銅製の帶先金具が、中国陝西省永泰公主墓より出土している（陝西省文物管理委員会「唐永泰公主墓發掘簡報」『文物』1964年第1期）。

銅製瓔珞（図62）SX695出土。銅椀の口縁部を転用したものである。本来は、口唇部を一方の長辺とし、長さ4.0cm、幅1.7cmの長方形に加工されていたものと推定されるが、上半1/3を欠失する。上端から約1cmのところに、径3.0mmの円孔をもつ。銅椀は、推定口径21cm以下、口縁部は断面三角形状に内面に肥厚する。

銅椀を加工・転用した方形の瓔珞は、平城京右京八条一坊十一坪、同二坊十二坪（西市）などに類例が知られる。これらは、長辺と短辺の比が本例ほど大きくなく、定型化した転用品との指摘がある。

砥石・鉱滓 SD095上層、SD690上層などから砥石8点が出土し、西隆寺造営時の整地層からは鉱滓が出土した。調査面積に比して砥石の量がやや多い。（次山 淳）

表8 第299次調査 出土瓦類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6237	A	1	6761	A	10
6282	Ha	1	6764	A	3
?		1	型式不明		9
型式不明		6			
軒丸瓦計		9	軒平瓦計		22
丸瓦	平瓦	埴	凝灰岩	道具瓦他	
重量	182.5kg	478.9kg	1.1kg	4.4kg	
点数	2,471	7,399	4	39	
			面戸瓦	1	
			隅切平	1	
			刻印平「上」	1	
			道具瓦	1	

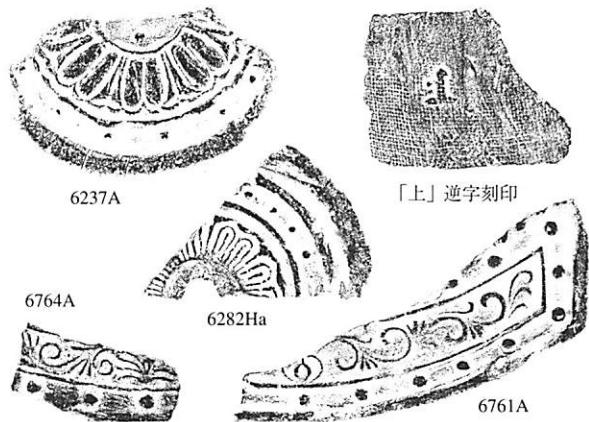


図63 第299次調査 出土瓦 1:4

② 土器類 土器は主としてSD095とSD690から出土した。時期的にはSD690Aでは平城Ⅰ期に限られ、ほかは平城Ⅲ期までを含む。土器の構成はいずれも土師器、須恵器からなる食器類が主体である。SD690Bでは完形または完形に近い大破片がめだつた。ほかに奈良時代の土器は、SK693からも少量出土した。やはり食器類で、平城Ⅲ期までに納まる。SK684からは、6世紀後半の須恵器杯が出土している。

SB680掘形からは土師器の細片がごく少量出土しているが、時期を限定できるものはなかった。

③ 瓦類 SK697ほかの土坑群から多量に出土し、SD095、SD690からも少量出土した(表8、図63)。SD095出土の軒丸瓦(6282Haおよび6282種不明)は、平城Ⅱ-2期に編年され、西隆寺創建以前の平城京宅地の時期に対応する。土坑群出土瓦には、西隆寺創建時の軒丸瓦6237A、軒平瓦6761A、6764Aなどの軒瓦や、平瓦凹面に「上」の逆字の刻印を有するもの(SK727)がある。

5. まとめ

まず、西隆寺北面回廊については、柱位置の予想位置に礎石の据え付け跡を確認した。柱間も桁行10尺、梁間各8尺の複廊として無理がない。これにより金堂の背面には回廊が通ることは確実となり、講堂がとりつく可能性は、ほぼなくなったとみてよい。

次に、西隆寺に先行する平城京の遺構に触れる。十坪に関しては、これまでSD095の存在などにより、1町以下の宅地であることが想定されてきたが、今回、北を限るSD690の検出により、それが確定したことになる。十坪の北西隅には塵芥処理用と思われる土坑(SK693)の他には建物などの顕著な遺構が存在しないことも、宅地の隅の様相としてふさわしい。なお、溝と土坑の間に

は埠などの顕著な閉塞施設は検出されなかった。

SD690については、条間北小路南側溝とみなした。第212次調査(1990年)で、今回の調査区の東約25mの位置から東へ約14mの長さにわたって、1対の東西溝(間隔約6m)が検出されており、その南側の溝SD452は、SD690Bの、北側の溝SD451はSD691のそれぞれ延長上に位置するので、本来一連の溝と認められよう。先述のようにSD690については、大きく3期の変遷が認められたが、問題になるのは、SD690Aの性格である。SD690Aは比較的短期間のうちに廃絶し、位置を北にずらしてSD690Bとなっている。この移動は、土器からみて平城宮Ⅰ期のうちであろう。平城京内の各所で実例のあるように『続日本紀』にみえる和銅6年(713)の尺度改定による条坊道路側溝の掘り直し(注:井上和人「古代都城制地割再考」『研究論集Ⅶ』1985)に関連する可能性がある。かつて『西隆寺発掘調査報告書』(1993)では、SD451・452について「九・十坪の坪境小路心の想定線より北約15mに位置し、坪境小路に関連するものとみるには距離が離れすぎる。九坪内の区画溝であろう」とした。今回の調査区では「想定線」に該当する遺構は存在しない。SD451・452の延長に位置する一対の東西溝が、東西50mにわたって確認されたことにより、この遺構を条坊側溝として、この地域の条坊の様相の再検討が求められているとみた。

平城京以前の遺構として大型の建物が検出されたことも特筆される。断面長方形の角柱は、藤原宮下層(藤原宮第41次調査SB3650、『藤原概報15』)に類例があるが、非常にまれなものである。西隆寺周辺の調査では、これまで、SB680と同様の、北で西に大きく振れる方位をもつ遺構(掘立柱建物、竪穴住居、溝など)が検出されており、相互の関連に興味がもたれる。

(千田)